第1回　阪奈和小児がん連携施設連絡会緩和ケア部会　議事録

資料１－５

日時：平成28年9月21日（水）17：00～19：10

出席者：平山・堀上（大阪府母子）、藤野（大阪赤十字）、坂田・中前（近畿大学）、宮村（大阪大学）時政・辻・太田（大阪市大）、井上・本吉・平井（大阪医科大）、塩田・長谷川（北野）、石原（奈良医大）、辻本・志良堂・浦野（和歌山医大）、原・多田羅・宇野・宮本・大濱・佐藤（大阪市立総合）

司会：多田羅　書記：佐藤

1. 事前アンケート結果からの現状・課題についての情報共有
2. 症状緩和について

＊大阪医科大：基本的には緩和ケアチームは成人を対象としている。症例は少ないため、悩みながらの日々。看護師は医師と連携を図りながら実践している。

＊近畿大学医学部付属：症例は年に1回程度のため、個々に対応している。

＊大阪府母子：小児緩和ケアガイド（他施設では使用経験なし）各病棟に設置されている。主治医の判断によるところが大きい。薬剤師により、病棟への薬剤情報提供や主治医・患者・保護者に対しても情報提供行っている。カンファレンスや会議へも出席している。子どものこころの診療科では、主にせん妄・不眠・2次がんに対する不安などでファーストコールがある。病棟に心理士が配属されている。

＊大阪赤十字：鎮静薬や向精神薬については使用経験は少ない。

＊奈良医科大：必ず緩和ケアチームが関わってくれている。疼痛マネジメントにおいてはかなり整理されるようになってきた。緩和ケアチームがお勧めを提案してくれる。

＊北野病院：緩和ケアチームは成人対応。これまでは個人の経験で行っていた。今後はできれば緩和ケアチームと連携し相談していきたい。

＊大阪市大：緩和ケアチームが相談したら関わってくれる。

＊和歌山県立医科大：ワンパターン化している傾向がある。

1. 終末期の療養環境・家族のサポートについて

＊大阪医科大：20歳以上のきょうだいは面会可としている。

＊近大：面会はフリーにしている。在宅でみれる医師限られているができるだけ自宅へ帰していく方向にしている。近大近辺に95施設ある。開業医にアンケート調査を行いデーターベース化している。HPで確認できる。

＊府立母子：今年度新たに緩和病室を1室設置。これから運営予定。一般の家庭を想定した広めの個室になっている。

1. QOL向上に向けた多職種の取り組みについて

＊近大：持ち込みをOKにしてもらい、経口摂取できるように取り組んでいる。

＊府立母子：主治医がNSTへコンサルトし、点滴・食事などについて検討してもらっている。QST（QOLサポートチーム）も追加でアドバイスしている。血液腫瘍科と子どものこころの診療科の医師がQSTのトップとして活動しており、主治医による温度差はあまり感じられない。病棟Nsが困ったことをピックアップし、会議にかけている。主治医は依頼すれば、カンファレンスへ出席してくれる。

＊奈良医科大：学習支援に関しては、社会医学研究会の医大生がボランティア活動を通してサポートしている。

＊大阪市立大学：医大、看護学生の協力あり。

＊大阪市立総合：外来交流会やてらこや（学習支援）など運営している。てらこやは、学習支援の場となっているだけでなく、交流の場としても活用されている。

1. 緩和ケアチームの活動（小児がん診療との連携）

＊成人の緩和ケアチームに小児がん患者にどう関わってもらうか？小児の緩和ケア提供にはすごく大事である。小児は独特であり、関わる機会を増やしていければ。

1. 地域との連携

＊和歌山は広く、自宅療養中の小児がん患者を診てくれる在宅医や訪問看護STがなかなか存在しない。小児科医師による連携はしやすい。大阪市立総合より医療用SNS活用の紹介。スタッフ教育にも活用できる。

1. AYA世代への対応

＊大阪府立・市立高校の場合は、教師派遣などの制度を利用できる。高校生の留年については勉強の支援も必要だが、必ずしも留年が悪いこととは限らない。妊よう性の問題どうしていくか。同じ悩みをもつ仲間が集まるのがいいのか。自殺の問題にしてもリスクは高い。孤立しないような場をつくっていくことも必要か。各施設だけで解決できる問題でもないため、連携してやっていければ。

1. 子どもを亡くした遺族のサポート

＊終末期になる前から、緩和ケア提供されていると主治医も安心できる。亡くなた場所へ赴くことが困難なケースもあり、奈良医大では、外勤で遺族ケアが行われている。多様なサービスやアクセスを知っておくと個々で紹介できることもあり、選択肢をもっておくことが必要。

1. 今後の会の進め方

＊どの施設に小児がん患者が入院しても等しく医療や緩和ケアの提供が受けられるよう、また痛くて苦しむことがないように、まったく同じくというわけにはいかないだろうが、可能な限り知恵を出し合い、最善が提供できるように努めていくことが重要。提案や工夫、困りごとについて出し合い、そのことへのメッセージがあれば役立てることができる。今後は症例検討会を行っていくのがいいのか。例えば、困っていること、つらい思いをしたことなどをケースプレゼンテーションとして紹介していただき、ディスカションするなど。その方法もいいが、コンサルテーションシステムの確立も希望する。受ける医療が異なったり、もしかするとずれたことが行われているかもしれないことが危惧される。その時その時で相談したいケースも出てくるかもしれない。

医療用SNSを活用してみるのも1つ。ネットワークの構築と個別での相談にも対応できる。

症状緩和、特に痛みについては最優先の課題。今後ディスカッションしていく必要あり。

＊会の開催は、年3回ぐらいで行っていく。

1. 次回の開催日

＊日時：平成29年1月18日（水）17：00～19：00

＊場所：大阪市立総合医療センター　会議室は未定（後日お知らせ）